『大學』『中庸』における虚詞問題研究

——語気詞について

水　原　寿　里*

Particles in "Daxue（『大學』）" and "Zhongyong（『中庸』）"

Juri Mizuhara

要　旨　中国語を構成するものは，実詞と虚詞で，実詞は「体」，虚詞は「用」であり，実詞を働かせているものは虚詞ということは周知されている。中国語文法は語順と虚詞の用法に尽きるとよく言われる。語順はいくつかの型に帰納できるが，虚詞は個別的なものであり，一つ一つについて綿密な検討を加え，その用法を明らかにしておかなければならない。

中国人は古くから『五経』に生活の規範を求め，教養人必読の書として尊ぶとともに，これの解釈の学に多大の努力を重ねてきた。ただ，これらの書物は多くの事実を語るだけで，人間はいかに生くべきかという道理の記録に乏しい。この不便を救うべく，宋代の学者たちは，漢のころから『五経』に付随して尊ばれてきた『論語』と，それを最も忠実に祖述した『孟子』のほか『礼記』のうちから選び出した『大学』『中庸』の二つを合わせて『四書』と呼び，『五経』を読む前提書としてその価値を強調した。これらの書物の研究をふまえて，漢語の理解を追究すれば，当時の言語状態の把握も一層明らかになるだろう。

古代漢語の語気は様々な虚詞によって表示する。語法の結構上が西洋言語と大いに違う。語気詞は言語の情態を表示する語詞である。というわけで，上古時代の語法の語気詞に当時の口語の実際情況が表われ，構成していることになっている。

『大学』『中庸』の語気詞はその位置と作用により三種類に分けられる。句首語気詞・句中語気詞・句末語気詞がある。但し，独立語気詞がない。元朝，清朝の学者達の古代漢語に対する考証を比較しながら『大學』『中庸』のなかに使った語気詞を調べてみた研究である。

『大学』の成立について

『大学』は，もと『礼記』[1]の一篇の名であるが，現在の『礼記』は戴聖の編集した四十九篇で，『大学』はその第四十二篇に当たっている。『礼記』は，古文献を収集したものであるから，個々の篇がいつどのようにしてできたのかは，現在よく分らない。ただ，戴聖の編集は，漢の宣帝のころであり，甘露三年（前51年）より以前であることだけが確実である[2]。そこで，『礼記』の各篇の内容は，孔子よりあと，漢の宣帝（在位，前72～前36年）に至る，四百年余りの時期のどこかで成立したことになる。そのため，古来から『大学』の成立については，各種の説がある。

北宋（960～1126年）の程伊川[3]は，「孔子の遺書」というのみで，だれの作かは明確にしなかっ

* 本学講師　中国文化・語学

たが，南宋（1127～1279年）の朱子[4]になると，『大学』の経一章は孔子の言，伝十章は曾子[5]の意で，その門人がこれを記録したのだと云う。これは，孔子・曾子・子思[6]・孟子[7]という道統を強調するためであって，孔子の『論語』[8]，子思の『中庸』，孟子の『孟子』[9]に対して，曾子の『大学』，というように巧みに割り当て，しかもこれを五経[10]から独立させて「四書」と名づけ，儒教の根本経典としたのである。それにはなんの証拠もない。しかし，この考えは，宋・明を通じて有力であった。ただ，明朝（1368～1644年）末期の劉宗周[11]は，偽石経大学を信じ，『大学』を子思の作だと考えていた。荻生徂徠[12]は，孔子の七十人の高弟の伝えたものといい，中に曾子の言があるのは，曾子の弟子が伝えたのだといっている。伊藤仁斎[13]は，『大学』の書は，戦国時代[14]に，斉・魯の諸儒で，『詩経』[15]『書経』[16]をよく読んではいたが，孔門の宗旨をうかがい知らない者が作ったのだという[17]。

以上の諸説は，いわば中世的な思考法に基づくもので，いずれも孔子・孟子の教えを金科玉条とし，それとの関係において，『大学』『中庸』を論じ，肯定したり否定したりしたにすぎないのであって，真に客観的に『大学』の成立を検討しようとしたわけではなかった。

このように『大学』が，先秦（前221～前207年）の古書ではなく，漢代の製作であることをその結論としている。この以上の細部の点に至っては，甲論乙駁，容易には決定しがたいことと思われる[18]。

宋代になって，科挙[19]に合格した新しい進士に，『大学』『中庸』その他を，天子から下賜する風が起こった。国家の官僚としては，『大学』『中庸』をその心得とすべきだという意図からであった。『大学』の表彰が朝廷に由来することは，やはり，注意されてよい。のちに，朱子の改定した『大学章句』が，やはり明朝（1368～1644年）によって標準版として表彰され，科挙の必読書となったことへもつながった現象であろう。『大学』は為政者たる士大夫[20]にとっての心得書となっていったのである。朱子の『大学章句』は，まさに，士大夫個人の修養書としてより多く解釈されているのである。北宋の曾鞏[21]・司馬光[22]などが，帝王学の原理としてこれを論じているのは，なお，漢・唐の余風を受けるものであった[23]。

宋代に立てられた四書五経という段階づけは，今日で言えば，カリキュラム（教科課程）というべきものである。もちろん，この段階に入る前に，小学として『千字文』[24]や『三字経』[25]あるいは『百家姓』[26]などを使って，文字や一般常識を勉強するわけである。こうしたカリキュラムは，東アジアの知識人にとって共通のものであった。だから，つい百年ほど前まで，中国人と同じく，日本人も大体，同一内容の教科書を使っていた[27]。

さて，四書の第一段階は『大学』というテキストの学習である。この本を手がかりに，勉学の始まりである。まさに，小学から『大学』への切り替わりであるから，学生に取り，非常に印象的であった[28]。

北宋の学者程頤曰く：「大学，孔子之遺書，而初学入徳之門也。於今可見古人為学次第者，獨頼此篇之存；而論，孟次之。学者必由是而学焉，則庶乎其不差矣。」[29]

南宋の大思想家・儒学者朱熹曰く：「……人生八歳，則自王公以下，至於庶人之子弟，皆入小学；而教之以灑（さい）掃應對進退之節，礼楽射御書数之文。及其十有五年，則自天子之元子，衆子，以至

公卿大夫，元士之子，與凡民之俊秀，皆入大学；而教之以窮理正心脩己治人之道。……時則有若孔子之聖，而不得君師之位以行其政教；於是獨取先王之法，誦而傳之，以詔後世。……而此篇(大学)者，則因小学之成功，以著大学之明法；外有以極其規模之大，而内有以盡其節目之詳者也。三千之徒，蓋莫不聞其説；而曾氏之傳，獨得其宗，於是作為傳義以發其意。及孟子没，而其傳泯焉。則其書雖存，而知者鮮矣。……於是河南程氏両夫子出，而有以接乎孟氏之傳。實始尊信此篇而表彰之；既又為之次其簡編，發其歸趣。然後古者大学教人之法，聖經賢傳之指，粲然復明於世……」[30]

程頤は「初学入徳ノ門ナリ」と書いているが，内容は相当に抽象的である。そういうわけであるから，文字を学ぶ小学の時代とは違い，『大学』に対して内容把握を第一としつつ，それこそ眼光紙背に徹するようにして読んでいたわけである。ところが一つ問題がある。たとえば『千字文』の場合，すべて四文字で一句を構成した簡単な文である。文法用語でいえば，ほとんどが単文であり，複雑な構造の文は出てこない。ところが，その複雑な文としてぶつかるのが『大学』あたりということになる。もちろん，『孝経』[31]などは，番外として学習していたではあろうが，少なくとも，四書五経という体系的学問のスタートにおいては，複雑な文構造を研究的に探りつつ，内容理解するという態度であらざるをえない[32]。

あらゆる面で『大学』を研究した学者が多かったが，その研究をふまえて，今度，熟読玩味のなかで文法構造の角度より虚詞問題中の語気詞を通じて，当時の文言文の語法構造を探究してみた。

『中庸』の成立について

『中庸』は『礼記』中の一篇であって，今の『礼記』の第三十一篇に当たる。その作者や成立の時期については，『大学』と同様に諸説がある。

前漢（前206～8年）の歴史家である司馬遷の『史記』の「孔子世家」の文中に「孔子生鯉，字伯魚。伯魚年五十，先孔子而死。伯魚生伋，字子思。年六十二。嘗困於宋，子思作『中庸』とあるのに基づき，『中庸』の作者は子思と考えられた。

後漢（25～214年）学者鄭玄[33]は，「孔子之孫，子思伋作『中庸』，以昭明聖祖之徳』といっている[34]。『漢書』[35]芸文志に「子思二十三篇」と記録されている。『隋書』[36]経籍志，『唐書』[37]芸文志には「子思子七巻」とある。子思子と呼ばれるようになったのは隋・唐に始まるのである。二十三篇と七巻という相違は，要するに二十三篇本と七巻にまとめたのであろうといわれる[38]。

北宋程頤曰く：「不偏之謂中，不易之謂庸。中者，天下之正道；庸者，天下之定理。此篇乃孔門傳授心法；子思恐其久而差也，故筆之於書，以授孟子。其書始言一理，中散為萬事，末復合為一理。放之則彌六合，巻之則退藏於密。其味無窮；皆實學也。善讀者玩索而有得焉；則修身用之，有不能盡者矣。」南宋朱熹曰く：「中庸何為而作也？　子思子憂道學之失其傳而作也。……若吾夫子[39]，雖不得其位；而所以継往聖開來學，其功反有賢於高，舜者。然當是時，見而知之者，惟顔氏[40]，曾氏之傳得其宗。及曾氏之再傳，而復夫子之孫子思；則去聖遠，而異端起矣。子思懼夫子愈久而愈失其眞也，於是推本高，舜以來相傳之意，質以平日所聞父師之言，更互演繹，作為此書，以詔後之學者。」[41]

もっとも一方には，『中庸』を子思の作ではないと疑う人々もなかったわけではない。北宋の欧

陽修[42]・蘇軾[43]などである。清朝[44]では崔述[45]があった。これらの中庸否定論はいずれも，中庸の内容が，孔子の思想を正しく伝えていないという判断によるのである。これをはっきりと論じたのが日本の伊藤仁斎である。「『中庸』もまた孔子の言を演繹している。この書物は確かに子思が作ったのかどうか分らないけれども，しかし，その言は『論語』と合致しているというように，総括的には中庸を認めながら，その内容については，いろいろと批判している[46]。

『中庸』の成立については，『大学』と同じく不明な点が多い。現在のところ，秦の始皇のころか，漢の武帝のころかというのが一つの争点である。今一つは，『中庸』を筋の一貫した完整の書とみるが，または雑然とした編集物とみるかである。第一の争点については，今のところ決定しがたい。結論的に言っておけば，『中庸』が「中」「誠」などを中心として，関連する文章を寄せ集めた書物である。「中」は儒仏道三教[47]を貫く中心題目とされている。この「中」は表現を越えた深遠極まりないもので，強いて名づければ，「誠」であり，「隠」であり，「一」であり，つまり「未発之中」という，言語を絶したものだという。そこで，孔・老・釈迦の道の大なることが，天下万世に明らかとならないのである。これが『中庸』の部の結論となっている。『中庸』が『易経』とつながり，そこからやがて，老子・釈迦にまでつながっていく。三教は結局のところ，「中」の一字に集約され，したがって，三教を合一し，三教を越えたところに本源があることになる。『中庸』が『論語』に比べれば，もちろんより体系的であることは言うまでもなく，確かに儒教概論ということができる[48]。

『大学』『中庸』のなかの句首語気詞，句中語気詞，句末語気詞などの虚詞問題研究

人間は，思想や感情を他人に伝達する場合に，まとまった言語単位を必要とする。このまとまった言語単位が文であり，その文についての一定の形式・方法をまとめたものが文法である。

言語単位のもっとも小さいものは単語である。単語は，その性質と用法によっていくつかに分けられる。これを品詞の分類という。品詞の分類については，必ずしも一定したものはないが，中国語では通常，名詞，代名詞（代詞），動詞，助動詞，形容詞，数詞，助数詞（量詞），副詞，前置詞（介詞），接続詞（連詞），助詞，語気詞という区分がなされている。そして，これらは大きく実詞（実字）と虚詞（虚字）に分けられる。本来，事物・動作・変化・性状・数量など，実質的な概念を表し，単独で文になることができるものを実詞（実字）と呼ぶ。ただ現在の段階では単語の品詞分類の方法や種類自体，研究家によって多少の違いがあり，また，実詞・虚詞の分類にも諸説がある。名詞・動詞・助動詞・形容詞を諸家は一致して実詞（実字）とするが，数詞・助数詞（量詞）・代名詞（代詞）・副詞などは，どちらに属させるか説が分かれる。ここでは辯論しないが，前置詞（介詞）・接続詞（連詞）・助詞・語気詞などは，ふつう虚字に分類される[49]。

中国の古代漢語語法大師の王力博士[50]は虚詞の大切さを以下に譬えたことがある。「既然虚詞的意思是比較空虚的，我們説話做文章，還要虚詞做什麼？　讓我拿建築来做譬喩吧！　実詞好比磚・瓦・石頭，虚詞好比青灰・三合土。磚・瓦・石頭固然是重要的，但是，如果缺少了青灰・三合土，房子還是造不起来。因此，虚詞是很重要的。……虚詞，並不是真的“空虚”，它是有它的意義和作用的。我們必須徹底了解它的意義和作用，然後才有可能把文章做好。」（虚詞は不要？　虚詞は無

意味だということに対して建築物を例に引いて，実詞は煉瓦・瓦・石材，虚詞は漆喰・セメントにあたる。煉瓦・瓦・石材は勿論，大切だが，漆喰・セメントが無ければ，家は成り立たないように虚詞は重要である。……実は虚詞は“空虚”ではない。それには意義と作用がある。それの意義と作用をよく把握すれば，文章をむだなく的確に表現することは可能である。）と[51]。

以上のたとえで「実詞」は「体」，「虚詞」は「用」で，お互いの働きの大切さが分る。

「虚詞」のなかに「語気詞」があり，語気詞とは，話し手が事象をどのようにとらえているかを示すものと，話し手が聞き手に対してどのように訴えるかをしめすものに分かれる。後者はさらに疑問・推測・命令などを現わすものと，呼びかけ・督促・誇張などを現わすものに分かれる。以上三種の語気詞のうち，はじめの二種は平敍文・疑問文・命令文……など，文の成立にあたってそれぞれにその文の文法的意味（機能）を現わすものであり，後の一種は話し手の態度や気持をあらわすものである。漢文としては，文意を明らかにする上で大切な働きをもっている。「語気詞」の用法は繁雑であるが，しかしこの知識が確実でなければ，漢文を正確に訳解することは難しい。

中国人が古来，生活の規範を求め，教養人必読の書として尊ばれ，これの解釈の学に多大の努力を重ねてきた『大学』『中庸』。そのなかで使われる「語気詞」について分類すれば，その位置と働きにより，〈一〉句首語気詞〈二〉句中語気詞〈三〉句末語気詞に分けられる。

〈一〉句首語気詞

句首語気詞は句首にあり，古人が「発語詞」「発声詞」と稱するもの。句首語気詞は感情を表す或いは語気を興発する，また語気を転換するという。『中庸』の句首語気詞には「夫」「其」を使ってあり，『大学』のなかには句首語気詞はない。長文だが研究者の文を引いてみる。

①夫：

元，盧以緯著・清，王克仲集注『助語辭集注』第四十九頁：「“夫”字在句首者，為發語之端。在句末者，為句絶之餘聲，亦意婉而聲衍。」

清，王引之『經傳釋詞』巻十第一三一頁：「“夫”，發聲也。」

清，馬建忠の『馬氏文通』巻五，第五十六頁：「夫字，孝経諫諍章注疏云，夫，發言之端。爾雅郭敍，有夫爾雅者，邢疏云，夫者，發語辭。」

王力，『古代漢語』第二册第四六一頁：「“夫”（fú）字用於句首，表示要發議論。它是從指示代詞“夫”字發展來的，已経変成了純粋的語気詞，不能再解作“這個”或“那個”。現代漢語裏没有適當的虚詞可以和它對譯。」

『中庸』のなかに句首語気詞として，語気を興発する「夫」字が次の三つをあげられる。

- 夫孝者，善繼人之志，善述人之事者也。
- 夫政也者，蒲盧也。
- 夫焉有所倚？

②其：

元，『助語辭集注』第一一九頁：「“其”同“豈”，反説以見意，有如俗語“那裏是”之意，或有如“莫”字之意。韻書云“安也”，乃“安可”，“安能”之安，非“安寧”之“安”。“焉也”“曾

也”。又曰“非然之辭”。

清，王引之『経傳釋詞』:「“其”字，除指稱外，又表語気，或為測度，擬議，同“殆”字。」

清，『馬氏文通』巻二第三十八頁:「“其”為一句之起詞，而“其”字在主次者，問句，倒文。」

王力，『古代漢語』第二册第四六一頁:「語気詞“其”字用於句首或句中，表示委婉的語気。在陳述句或疑問句裏，它表示“大概”“恐怕”等意思。」

『中庸』のなかに句首語気詞「其」,「反問語気」として使ったのは，次の一つがある。『大学』には無し。

- 苟不固聰明聖知達天徳者，其孰能知之。

〈二〉句中語気詞

句中語気詞は，句のなかにある。語気の順応，停頓或いは感情を表すという。『大学』『中庸』の句中語気詞は:「也」,「之」,「其」,「哉」,「者」,「兮」などがあげられる。

①也:

元，盧以緯『助語辭』第一頁:「“也”，是句意結絶處。」

清，王引之『経傳釋詞』注本常語篇『文言虚字』第一八一頁:「“也”字，用在句中表停頓的語気，正如白話裏用“啊”字一様。這也可以分幾類來看，有時候在主語之後用“也”字一頓。有時候在副詞（尤其是表時間的）後用“也”字一頓。而小句之後用“也”字停頓的尤其多。還有，在列挙事物的時候也常用“也”字表停頓。」

王力，『古代漢語』第一册第二四一頁:「秦漢以前，判断句一般不用繫詞，而是在謂語後面用語気詞“也”字來幇助判断。」

『大学』『中庸』のなかに文中語気詞の「“也”は三十六ヵ所をあげられる。停頓の働き，上の語句を明らかに指示する。「也」字の位置の違うにより，五種類に分けられる。

1.「主語」,「起詞」の後に使用したのは一ヵ所をあげられる。

- 斯礼也，達乎諸侯，士大夫及士，庶人。(『中庸』より)

2.「附属小句」の後に使用したのは，『中庸』のなかから，十ヵ所をあげられる。『大学』には無し。

- 君子之中庸也，君子而時也。
- 小人之中庸也，小人而無忌憚也。
- 道之不行也，我知之矣。
- 道之不明也，我知之矣。
- 回之為人也，擇乎中庸，得一善，則拳拳服膺而弗失之矣。
- 及其至也，雖聖人亦有所不知焉。
- 及其至也，雖聖人亦有所不能焉。
- 天地之大也，人猶有所憾。
- 君子之道，造端乎夫婦，及其至也，察乎天地。
- 今夫天，斯昭昭之多，及其無窮也，日月星辰繫焉，萬物覆焉。

3.「列挙事物」に使用したのは，『中庸』のなかから，二十ヵ所をあげられる。『大学』に無し。

- 天下之達道五，所以行之者三，曰君臣也，父子也，夫婦也，昆弟也，朋友之交也，五者，天下之達道也。知，仁，勇三者，天下之達徳也，所以行之者一也。
- 凡為天下国家有九経，曰：修身也，尊賢也，親親也，敬大臣也，體群臣也，子庶民也，來百工也，柔遠人也，懐諸侯也。
- 天地之道：博也，厚也，高也，明也，悠也，久也。

4.「句首限制詞」の後に使用したのは『大学』のなかから，一ヵ所をあげられる。

- 聽訟，吾猶人也：必也使無訟乎！

5.「停頓語気詞」の「者」の前に使用し，「也者」と連用して，その意味をいっそう強めることがあるのは，『中庸』のなかから，四ヵ所をあげられる。『大学』には無し。

- 道也者，不可須臾離也。
- 中也者，天下之大本也。
- 和也者，天下之達道也。
- 夫政也者，蒲盧也。

②之：清，馬建忠『馬氏文通』巻七第一頁：「“之”字之用七。其一，以介於両名字之間者。其二，以介於静字名字之間者。其三，以介於代字名字之間者。其四，以介於名字動字之間者。其五，散動字用於偏次，而名字在正次者，率間之字以明之。其六，凡読於起詞坐動之間，間以之字，一若緩其辭気者然。其七，凡止詞先乎動字者，倒文也。如動字或有弗辭，或為疑辭者，率間之字，辭気確切者，間参是字。」

『大学』『中庸』の句中語気詞として，「順適語気」と「止詞提前」の「之」の使用したのは，十ヵ所をあげられる。

- 如惡惡臭，如好好色，此之謂自謙。
- 此之謂矩之道。
- 此之謂民之父母。
- 小人之使為国家，菑害並至，雖有善者，亦無如之何矣。

（以上『大學』より）

- 天命之謂性，率性之謂道，修道之為教。
- 庸徳之行，庸言之謹，有所不足，不敢不勉，有餘不敢盡。
- 詩曰，既明且哲，以保其身，其此之謂與。

（以上『中庸』より）

③其：清，『馬氏文通』巻一第三十七頁：「其字，或為一句之起詞，或為一句之止詞，或其読有連字而詞気未全者，至承接之読，則其字仍居主次，而為接続代字。」

李玲璞『古代漢語精解』第一八二頁：「主要表示一種委婉的語気或情態，通常用來表示揣度，推測，可譯為“大概”“可能”，“或許”等。」

『大学』『中庸』のなかの句中語気詞として，推測，話し合いの語気で使用したのは十四ヵ所をあげられる。

- 曾子曰：「十目所視，十手所指，其嚴乎！」

（以上『大學』より）

- 子曰：「中庸其至矣乎！民鮮能久矣。」
- 子曰：「道其不行矣。」
- 子曰：「舜其大知也與！」
- 子曰：「舜好問而好察迩言，隱惡而揚善，執其両端，用其中於民，其斯以為舜乎！」
- 子曰：「父母其順矣乎！」
- 子曰：「鬼神之為徳，其盛矣乎！」
- 子曰：「舜其大孝也與！」
- 子曰：「無憂者，其惟文王乎！」
- 子曰：「武王，周公其達孝矣乎！」
- 子曰：「明乎郊社之禮，禘嘗之義，治国其如示諸掌乎！」
- 詩曰：「既明且哲，以保其身」其此之謂與。
- 王天下有三重焉，其寡過矣乎！
- 君子之所不可及者，其唯人之所不見乎。

（以上『中庸』より）

④兮：元，盧以緯『助語辭』：「兮字，有在句中者，有在句末者，皆詠歌之助聲。」

陝西師範大学『古漢語虚詞用法詞典：「兮（xi）語気詞，用在句中或句末，舒緩語氣。」

『大學』のなかに句中語気詞の「兮」字が「緩和語気」として使ったのは十ヵ所をあげられる。

- 瑟兮僩兮，赫兮喧兮，有斐君子終不可諠兮。
- 瑟兮僩兮者，恂慄也。赫兮喧兮者，威儀也，有斐君子，終不可諠兮者，道盛徳至善，民之不能忘也。
- 秦誓曰　若有一個臣，斷斷兮，無他技，其心休休焉。其如有容焉。

⑤哉：元，盧以緯『助語辭』第十六頁：「哉，句絶而有嗟歎之意。」

清，馬建忠『馬氏文通』傳疑助字九之五第四十八頁：「哉字，説文謂言之間也。禮記曾子問正義曰，哉者，疑而量度之辭，説文之解不切，正義之解不全，蓋哉音啓齒，其聲悠長，経籍用以破疑而設問者蓋寡，用以擬議量者居多，而用以往復咏歎者則最稱也，所用一切句式，與乎字同。」

清，王引之『経傳釋詞』常語本第二〇八頁：「哉字，有用在句中的，即謂語倒在主語之前時用之。即目前之事発為感嘆。」

『中庸』のなかに「謂語倒在主語前」の用法として「感歎，停頓」の語気を表したのは，六ヵ所をあげられる。『大学』のなかには，無し。

- 故君子和而不流，強哉矯。
- 中立而不倚，強哉矯。
- 國有道，不変塞焉，強哉矯。
- 國無道，至死不変，強哉矯。
- 大哉，聖人之道，洋洋乎，発育萬物，峻極于天。
- 優優大哉，禮儀三百，威儀三千，待其人然後行。

⑥者：元，盧以緯『助語辭』第九頁：「有“者”前，“也”後，“者”挙其説於前，“也”釋其意於後以應之。」

清，馬建忠『馬氏文通』第五十四頁：「者字，為用有七，一為句之起詞，二為止詞，三為表詞，四為司詞，五居偏次者，六用若加語者，七有假設詞気者。」

清，王引之『経傳釋詞』常語本第十八頁：「者字，大別為稱代和提頓両類。提頓之用法分二類，或用在一詞之後，或用在一小句之後，者字作頓的小句，多数是假設小句。」

『大学』『中庸』のなかに「句中語気詞」として，語気の「停頓」を表わしたのは，三十三ヵ所をあげられる。

- 所謂誠其意者，毋勿欺也。
- 如切如磋者，道学也。
- 如琢如磨者，自修也。
- 琴兮僩兮者，恂慄也。
- 赫兮喧兮者，威儀也。
- 有斐君子，終不可喧兮者，道盛徳至善，民之不能忘也。
- 所謂修身在正其心者，身有所忿懥，則不得其正。
- 所謂齊其家在修其者，人之其所親愛而辟焉。
- 所謂治國必先齊其家者，其家不可教而能教人者，無之。
- 孝者，所以事君也。
- 弟者，所以事長也。
- 慈者，所以使衆也。
- 所謂平天下在治其國者，上老老，而民興孝，上長長而民興弟，上恤孤而民不倍，是以君子有絜矩之道也。
- 徳者，本也。
- 財者，末也。
- 言悖而出者，亦悖而入。
- 貨悖而入者，亦悖而出。
- 為之者疾，用之者舒，則財恆足矣。

（以上『大學』より）

- 道也者，不可須臾離也。

- 中也者，天下之大本也。
- 和也者，天下之達道也。
- 夫孝者，善継人之志，善述人之事者也。
- 夫政也者，蒲盧也。
- 仁者，仁也。
- 義者，宜也。
- 誠者，天之道也。
- 誠之者，人之道也。
- 誠者，不勉而中，不思而徳，従容中道，聖人也。
- 誠之者，擇善而固執之者也。
- 誠者，自成也，而道，自道也。
- 誠者，物之終始，不誠無物。
- 誠者，非自成己而己也，所以成物也。

（以上『中庸』より）

〈三〉句末語気詞

漢文の句末語気詞は四種類に分けられ，①陳述語気詞：「也」「矣」「焉」「耳」等。②疑問語気詞：「乎」「與（歟）」「邪（耶）」「哉」「也」等。③「停頓」語気詞：「者」「也」。④「祈使」と感嘆の語気詞：「矣」「也」「哉」等があげられる。

『王力文集』第三巻「漢語的特点」第六六七頁：「漢語的語気詞放在一句的末尾，所表示的語気有確定語気，揣測語気，假設語気，商量語気，説服語気，当然語気，答辯語気，誇張語気，疑問語気，反問語気等。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九第五十八頁：「古人謹爾話言，往往意在言外，記者追憶其言而筆之，筆之或不足擬其辭，故助以聲。一之不足而再焉，而参焉，至辭気畢達而止。」また，「記者追述言者之辭気已耳，故凡句之有合助者，大抵皆由咏歎而発，又凡助字之疊助一句也，各以本意相加，非以二三字之合助，而更幻新意者也。」

『中庸』の句末語気詞の連用形も現われ，「矣乎」「矣夫」「也與」等をあげられ，先ず「傳信助字」の「也」，「矣」を文末に置いて，次に「傳疑助字」の「乎」「與」「夫」等をつけ加わえて，語気上の連用形は語気を強める効果が現われる。

①也：元，盧以緯『助語辭』：「“也”者，語已辭。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九第三頁：「廣韻云，也，語助也，辭之終也。顔子家訓書證篇亦云，也，語已及助句之辭。愚謂也字所助有三曰助句，曰助読，曰助實字，以視所謂三用者，較為涵蓋。」

清，王引之『経傳釋詞』常語本：「也字用法，可大別為句末和句中両類。句末的也字，雖也用在疑問，感歎，命令等語気，却是以用在直陳語気為最多。」

『大学』『中庸』の句末語気詞の「也」として，一一九ヵ所をあげられる。すべて「陳述語気」

の使用である。

- 其所厚者薄，而其所薄者厚，未之有也。此謂知本，此謂知之至也。
- 所謂誠其意者，毋自欺也。
- 此之謂自謙，故君子必慎其獨也。
- 誠於中，形於外，故君子必慎其獨也。
- 如切如磋者，道學也。如琢如磨者，自修也。瑟兮僩兮者，恂慄也。赫兮喧兮者，威儀也。有斐君子，終不可諠兮者，道盛德至善，民之不能忘也。
- 君子賢其賢，而親其親。小人樂其樂，而利其利，此以没世不忘也。
- 帝典曰，克明峻德，皆自明也。
- 聽訟，吾猶人也。必也使無訟乎。
- 故君子不出家，而成教於國。孝者所以事君也。弟者所以事長也。慈者所以使衆也。
- 如保赤子，心誠求之，雖不中不遠矣，未有學養子而后嫁者也。
- 是故君子有諸己，而后求諸人，無諸己，而后非諸人，所藏乎身不恕，而能喻諸人者，未之有也。
- 詩云，其儀不忒，正是四國，其為父子兄弟足法，而后民法之也。
- 上恤孤而民不倍，是以君子有絜矩之道也。
- 德者本也。財者末也。
- 見賢而不能舉，舉而不能先，命也。見不善而不能退，退而不能遠，過也。
- 未有上好仁而下不好義者也。未有好義其事不終者也。未有府庫財非其財者也。
- 與其有聚斂之臣，寧有盜臣，此謂國不以利為利，以義為利也。
- 小人之使為國家，菑害竝至，雖有善者，亦無の如之何矣。此謂國不以利為利，以義為利也。

（以上『大學』より）

- 道也者不可須臾離也。可離非道也。
- 莫見乎隱，莫顯乎微，故君子慎其獨也。
- 中也者，天下之大本也。和也者，天下之達道也。
- 小人之中庸也，小人而無忌憚也。
- 知者過之，愚者不及也。
- 賢者過之，不肖者不及也。
- 人莫不飲食也，鮮能知味也。
- 舜其大知也與。
- 人皆曰予知，驅而納諸罟獲陷穽之中，而莫之知辟也。人皆曰予知，擇乎中庸，而不能期月守也。
- 天下國家可均也。爵禄可辭也。白刃可蹈也。中庸不可能也。
- 寛柔以教，不報無道，南方之強也。
- 衽金革，死而不厭，北方之強也。
- 鳶飛戾天，魚躍于淵，言其上下察也。

- 君子之道四，丘未能一焉。所求乎子，以事父未能也。所求乎臣，以事君未能也。所求乎弟，以事兄未能也。所求乎朋友，先施之未能也。
- 舜其大孝也與。
- 父母之喪，無貴賤一也。
- 夫孝者，善繼人之志，善述人之事者也。
- 宗廟之禮，所以序昭穆也。序爵，所以辨貴賤也。序事，所以辨賢也。旅酬下為上，所以逮賤也。燕毛，所以序齒也。
- 事死如事生，事亡如事存，孝之至也。
- 郊社之禮，所以事上帝也。宗廟之禮，所以祀乎其先也。
- 夫政也者，蒲盧也。
- 仁者人也。親親為大。義者宜也。尊賢為大。親親之殺，尊賢之等，禮所生也。
- 君臣也，父子也，夫婦也，昆弟也，朋友之交也，五者，天下之達道也。知仁勇三者，天下之達德也。所以行之者一也。
- 或生而知之，或學而知之，或困而知之，及其知之一也。
- 或安而行之，或利而行之，或勉強而行之，及其成功一也。
- 齊明盛服，非禮不動，所以修身也。去讒遠色，賤貨而貴德，所以勸賢也。尊其位，重其祿，同其好惡，所以勸親親也。官盛任使，所以勸大臣也。忠信重祿，所以勸士也。時使薄斂，所以勸百姓也。日省月試，既稟稱事，所以勸百工也。送往迎來，嘉善而矜不能，所以柔遠人也。繼絶世，舉廢國，治亂持危，朝聘以時，厚往而薄來，所以懷諸侯也。
- 凡為天下國家有九經，所以行之者一也。
- 誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中，不思而得，從容中道聖人也。誠之者擇善而固執之者也。
- 有弗學，學之弗能弗措也。有弗問，問之弗知弗措也。有弗思，思之弗得弗措也。有弗辨，辨之弗明弗措也。有弗行，行之弗篤弗措也。
- 誠者自成也。而道自道也。
- 誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合外內之道也。
- 故時措之宜也。
- 博厚所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成物也。
- 天地之道，可壹言而盡也。
- 維天之命，於穆不已，蓋曰天之所以為天也。於乎不顯，文王之德之純，蓋曰文王之所以為文也。
- 愚而好自用，賤而好自專，生乎今之世，反古之道，如此者，烖及其身者也。
- 吾説夏禮，杞不足徵也。
- 質諸鬼神而無疑，知天也。百世以俟聖人而不惑，知人也。
- 在彼無惡，在此無射，庶幾夙夜以永終譽，君子未有不如此而蚤有譽於天下者也。
- 萬物竝育而不相害，道竝行而不相悖，小德川流，大德敦化，此天地之所以為大也。

- 唯天下至聖，為能聰明叡知，足以有臨也。寛裕温柔，足以有容也。發強剛毅，足以有執也。齊莊中正，足以有敬也。文理密察，足以有別也。
- 詩曰，衣錦尚絅，惡其文之著也。
- 子曰，聲色之於以化民，末也。

（以上『中庸』より）

②夫：元，盧以緯『助語辭』：「夫字，在句末者，為句絶之餘聲，亦意婉而聲衍。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九傳疑助字第五十六頁：「夫字，在句末者，專解歎詞，夫字工於咏歎。」

『中庸』のなかに，感歎句末語気詞の「夫」として使われたのは二ヵ所をあげられ，『大学』のなかになし。

- 子曰：「道其不行矣夫。」
- 夫微之顯，誠之不可揜如此夫。

（以上『中庸』より）

③乎：元，盧以緯『助語辭』：「乎字，多疑而未定之辭，或為問語。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九傳疑助字：「乎字，説文謂語之餘也。檀弓正義云，疑辭也。語餘者，助字也。疑辭者，傳疑也。」

王力『古代漢語』第二七五頁：「疑問語気詞“乎”字，表示純粋的疑問。譯成現代漢語時，譯成“嗎”字。“乎”字跟“其”字相呼應時，表示一種委婉語気，略等於現代的“吧”字。有時“乎”並不表示疑問，而是表示感歎。」

『大学』『中庸』のなかに「乎」としての「句末語気詞」が十二ヵ所をあげられ，そのなかに一ヵ所が「反問語気」，そのほかの十一ヵ所が「感歎句末語気詞」の使い方である。

△「反問語気」としての「乎」一ヵ所：

- 詩云　邦畿千里，惟民所止。詩云　緡蠻黄鳥，止於丘隅。子曰　於止，知其所止，可以人而不如鳥乎。

△「感歎語気」としての「乎」十一ヵ所：

- 十目所視，十手所指，其嚴乎。
- 子曰　聽訟，吾猶人也，必也使無訟乎。

（以上『大學』より）

- 隱惡揚善，執其両端，用其中於民，其斯以為舜乎。
- 宜爾室家，楽爾妻帑，子曰　父母其順矣乎。
- 子曰　鬼神之為徳，其盛矣乎。
- 子曰　無憂者，其唯（惟）文王乎。
- 子曰　武王周公，其達孝矣乎。
- 明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎。
- 王天下，有三重焉，其寡過矣乎。
- 君子所不可及者，其唯人之所不見乎。

（以上『中庸』より）

④矣：元，盧以緯『助語辭』：「矣字，是句意結絶處。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九之三：「矣，傳信助字也。説文謂之語已辭。矣字者，所以決事理已然之口氣也。……於將來之事而助矣字者，所謂決其必了之口氣也。……有為歎字者。」

李玲璞『古代漢語精解』第二五二頁：「矣字是表示動態的句末語気詞，它總是把事物發展到一定階段的状況當作一種新情況告訴別人，帯有動作已経完成的意味。矣的用法可分三種：表示情況已経如何。表示將要或必将出現某種新的情況。表示感歎，也可用於祈使句，疑問句，感歎句的末尾，其実它仍然保留着自己特有的那種報道新情況的語気。」

『大学』『中庸』の「句末語気詞」としての「矣」が「陳述已然」「陳述將然」「感歎」の三種類に分けられる。

△「陳述已然」の句末語気詞「矣」字が六ヵ所をあげられる。

- 故好而知其惡，惡而知其美者，天下鮮矣。

（以上『大學』より）

- 中庸其至矣乎。
- 道之不行也，我知之矣。
- 道之不明也，我知之矣。
- 鬼神之為徳，其盛矣乎。
- 武王周公，其達孝矣乎。

（以上『中庸』より）

△「陳述將然」の句末語気詞「矣」字が二十六ヵ所をあげられる。

- 物有本末，事有終始，知所先後，則近道矣。
- 其本亂而末治者否矣。
- 心誠求之。雖不中，不遠矣。
- 有國者不可以不慎，辟則為天下僇矣。
- 康誥曰　惟命不于常。道善則得之，不善則失之矣。
- 生財有大道，生之者衆，食之者寡，為之者疾，用之者舒，則財恒足矣。
- 長國家而務財用者，必自小人矣。
- 雖有善者，亦無如之何矣。

（以上『大學』より）

- 道其不行矣夫。
- 回之為人也，擇乎中庸，得一善，則拳拳服膺而弗失之矣。
- 素隱行怪，後世有述焉，吾弗為之矣。
- 君子遵道而行，半途而廢，吾弗能已矣。
- 父母其順矣乎。
- 仁者人也，親親為大。義者宜也。尊賢為大。親親之殺，尊賢之等，禮所生也，在下位，不獲乎上，民不可得而治矣。

- 知所以修身，則知所以治人。知所以治人，則知所以治天下國家矣。
- 在下位不獲乎上，民不可得而治矣。獲乎上有道，不信乎朋友，不獲乎上矣。信乎朋友有道，不順乎親，不信乎朋友矣。順乎親有道，反諸身不誠，不順乎親矣。誠身有道，不明乎善，不誠乎身矣。
- 人一能之，己百之。人十能之，己千之。果能此道矣，雖愚必明，雖柔必強。
- 自誠明謂之性，自明誠謂之教，誠則明矣。明則誠矣。
- 可以贊天地之化育，則可以與天地參矣。
- 王天下，有三重焉，其寡過矣夫。
- 君子之道，淡而不厭，簡而文，溫而理，知遠之近，知風之自，知微之顯，可與入德矣。

（以上『中庸』より）

△「感歎」の句末語気詞「矣」字が四ヵ所をあげられる。

- 人之視己，如見其肺肝然，則何益矣。

（以上『大學』より）

- 中庸其至矣乎。民鮮能久矣。
- 上天之載，無聲無臭，至矣。

（以上『中庸』より）

⑤者：古代漢語の「者」字の定義と使用表現は「句中語気詞」に参看。

『大學』『中庸』のなかに句末語気詞「者」字を使ったのは八ヵ所をあげられる。この五ヵ所とも「者也」の連用形として句末に語気の完成を表した。

- 康誥曰　如保赤子，心誠求之，雖不中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。
- 未有上好仁而下不好義者也。未有好義其事不終者也。未有府庫財非其財者也。

（以上『大學』より）

- 如此者，烖及其身者也。
- 君子未有不如此，而蚤有譽於天下者也。
- 夫孝者，善繼人之志，善述人之事者也。
- 誠者不勉而中，不思而得，從容中道聖人也。誠之者擇善而固執之者也。

（以上『中庸』より）

⑥焉：元，盧以緯『助語辭』：「焉字，是語意結絶處。〔補義〕語助辭，語終辭，決辭。」

清，馬建忠『馬氏文通』傳信助字卷九之四：「焉字，語辭助句，凡述往事，其結句助有以焉字者。所以助陳述之口氣也。其為口氣也，案而不斷，而以之結句，隱然有坐鎮之概焉。又云，首句以有字為坐動，辭氣一頓，句置段首，故為提頓之句。焉字有解者，有無解者，閱者觀於前，可以反隅矣。」

清，王引之『經傳釋詞』：「焉字是個稱代詞，也是個語氣助詞，而這兩個用法，没有明確的界限。」

王力『古代漢語』第二五七頁：「焉它是語気詞，因為它經常用於敍述句的句尾來表示停頓，就一般情況説，它的後面不再加別的語氣詞。」

『大学』『中庸』のなかに「停頓語氣」としての句末語気詞「焉」字が三十一ヵ所をあげられる。

- 心不在焉。
- 所謂齊其家在修其身者，人之其所親愛而辟焉。之其所賤惡而辟焉。之其所畏敬而辟焉。之其所哀矜而辟焉。之其所傲惰而辟焉。
- 其心休休焉。其如有容焉。

（以上『大學』より）

- 天地位焉。萬物育焉。
- 夫婦之愚，可以與知焉。及其至也，雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖，可以能行焉。及其至也，雖聖人亦有所不能焉。天地之大也，人猶有所憾。故君子語大，天下莫能載焉。語小，天下莫能破焉。
- 今夫天斯昭昭之多，及其無窮也。日月星辰繫焉。萬物覆焉。今夫地一撮土之多，及其廣厚，載華嶽而不重，振河海而不洩，萬物載焉。今夫山一卷石之多，及其廣大，草木生之，禽獸居之，寶藏興焉。今夫水一勺之多，及其不測，黿鼉鮫龍魚鼈生焉。貨財殖焉。
- 雖有其位，苟無其德，不敢作禮樂焉。雖有其德，苟無其位，亦不敢作禮樂焉。
- 王天下，有三重焉。
- 國有道不變塞焉。
- 君子之道四，丘未能一焉。
- 君子無入而不自得焉。
- 故曰　苟不至德，至道不凝焉。
- 故天之生物，必因其材而篤焉。
- 素隱行怪，後世有述焉。

（以上『中庸』より）

⑦與：元，盧以緯『助語辭』：「與字，為句絶之餘聲。〔補義〕：説文：與字，安氣也又疑辭。又歎辭。又語末辭。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九傳疑助字之五：「與字，古同歟。語末辭。增韻曰疑辭也。與唇音，音之終。與字以助設問，以助擬議者其常，而助咏歎者，則不若哉字。」

王力『古代漢語』第二七七頁：「與（歟）字略等於現代漢語的“嗎”字或“呢”字。與字的疑問語氣並不是很強，在多数情況下，是説話人猜想大約是這樣一件事情，但是還是不能深信不疑，要求對話人加以證實。“邪（耶）”字和“與（歟）”字語法作用相同，古音相近，它們的不同大概是方言不同的緣故。」

『中庸』のなかに句末語気詞「與」字の使用が六ヵ所をあげられる。『大學』にはなし。

△疑問語気を表わし，「抉擇式の是非問句」として，三ヵ所をあげられる。

- 子曰　南方之強與。北方之強與。抑而強與。

△「擬議・量度」語気を表わしたのは，一ヵ所をあげられる。

- 詩曰　既明且哲，以保其身，其此之謂與。

△「感歎」語気を表わしたのは，二ヵ所をあげられる。

- 舜其大知也與。
- 舜其大孝也與。

⑧爾：元，盧以緯『助語辭』第一三三頁：「耳字，直為語餘聲。」

清，馬建忠『馬氏文通』巻九之三：「爾字，廣韻云，詞之必然也。鄭注檀弓謂，爾語助也。爾本状字，解如是也。今為傳信助字，可殿句，可殿讀焉，而亦有而已如是之意，其所以別於状字者，蓋加有決斷之口氣耳。」

清，王引之『経傳釋詞』第一九六頁：「耳字的語氣，有表示判定或解釋之意。」『中庸』のなかに，「判定・解釋」としての句末語気詞「爾」字が一ヵ所をあげられる。『大学』にはなし。

- 言顧行，行顧言，君子胡不慥慥爾。

⑨兮：元，盧以緯『助語辭』第一三四頁：「兮字，有在句中者，有在句末者，皆詠歌之助聲。」王克仲集注：「助聲，指語氣詞。文心雕龍章句云，又詩人以兮字入於句限，楚辭用之，字出句外。尋兮字成句，及語助餘聲。舜詠南風，用之久矣。」陝西師範大学詞典編写組『古漢語虚詞用法詞典』第五〇三頁：「兮（xi），語気詞，用在句中或句末，舒緩語気。用在感歎句末，助贊頌，慨嘆語気。可譯為“啊”。用在祈使句末，助禁止・商量語気。」『大学』のなかの句末語気詞「兮」字が感嘆の語気として使ったのは一ヵ所をあげられる。『中庸』にはなし。

- 有斐君子，終不可諠兮。

『大學』『中庸』のなかの語気詞について，条列式に調べたうえ，以下のように語気詞称説表解統計図をつくってみた。

『大學』『中庸』語気詞称説表解統計図〔単位：（　）ヵ所〕

語気詞	位置	作　　用	『大學』	『中庸』
夫	句首	興発語気	0	3
	句末	感歎語気	0	2
其	句首	反問語気	0	1
	句中	推測語気	1	13
之	句中	緩和語気	4	6
哉	句中	感歎兼停頓語気	0	6
也	句中	停頓語気	1	35
	句末	陳述語気	29	90
者	句中	停頓語気	19	14
	句末	完成語気	4	4
兮	句中	緩和語気	10	0
	句末	感歎語気	1	0
矣	句末	陳述已然語気	1	5
	句末	陳述将然語気	8	18
	句末	感歎語気	1	3
與（歟）	句末	疑問語気	0	3
	句末	擬議語気	0	1
	句末	感歎語気	0	2
乎	句末	反問語気	1	0
	句末	感歎語気	2	9
焉	句末	停頓語気	8	23
爾	句末	判定・解釈語気	0	1

結　　論

日本と中国との，ありし姿，あるべき姿を根底から反省する時がおとずれた。それにつれて，中国語を学習しようという日本人が急速にふえており，同時に学習者の志向も一様ではなくなってきている。

外国語の学習においては，集中的に基礎を固めながらも，その言語を使っている社会と文化の理解に努力しなければならない。それは自分を映し対比させてみる鏡である。また，当然のことながら，ことばそのものにあらゆる角度から接近し，基礎という核に肉付けをしなければならない。

本説は元，清の文言文語法研究者の著作をたどりつつ，整理，分類したもので，中国の古典書籍で字彙の用法が異なると，内容・働き，指示するものも異なる。以下は『大學』『中庸』の句首，

句中，句末語気詞の異同を述べる。

一．句首語気詞

①『大學』にはない

②『中庸』のなかに使用した句首語気詞は「夫」「其」をあげられる。「夫」字は興発語気として，「其」字は反問語気として使っていた。

二．句中語気詞

①『大學』のなかに，「其」「之」「也」「者」「兮」の五文字を句中語気詞として，推測語気，緩和語気，停頓語気，停頓語気，緩和語気として，使用した。

②『中庸』のなかに，「其」「之」「也」「者」「哉」の五文字を句中語気詞として，推測語気，緩和語気，停頓語気，停頓語気，感歎兼停頓語気として，使用した。

三．句末語気詞

①『大學』のなかに，「也」「者」「兮」「矣」「乎」「焉」の六文字を句末語気詞として，陳述語気，完成語気，感歎語気，陳述已然・陳述将然・感歎語気，反問・感歎語気，停頓語気として，使用した。

②『中庸』のなかに，「夫」「也」「者」「矣」「與（歟）」「乎」「焉」「爾」の八文字を句末語気詞として，感歎語気，陳述語気，完成語気，陳述已然・陳述将然・感歎語気，停頓語気，判定・解釈語気として，使用した。

以上，語気詞問題の研究によって，古代漢語の言語学と古代漢語の修辞学に対する用法と意味の解釈がもっと深く理解できるだろうと思い，試みた研究である。中国五千年黄河流域文化，長江流域文化の変遷を理解するために，古人が残した書籍，遺物のなかから学んでいくことも一つの手口とよく言われるが，その古籍中の記載文字が現代文ではないので，古代漢語の研究を必要としている。その的確な筋道の解明と研究も重要視すべきである。

現代中国語言学者王力博士の『王力文集』第五五〇頁～五六二頁に「漢語の語法特点が二つをあげられ，その一，詞序の固定。その二，虚詞の応用。言語は発展的なもの，古代漢語と現代漢語が同じではなく，語音と詞彙の発展は少し速いが，語法の発展は遅い。語法の発展に方言の区別は小さい。詞序を言うと，中国漢語方言の詞序が基本的に一致しておる。が，虚詞の差異は，方言語法の最大の差異である。また，文言虚字について，国民が絶えずに新しい語彙を作り出して，新文化，新道徳と新社会制度に適応する。新しい語彙は，古い語彙から転化してきたため，古代漢語を理解する能力を養いたい」という記載がある。

虚詞問題の探究によって，作者の生活の場所をさぐり出す一つの手法にもなるからだ。現代漢語の語言学と現代漢語の修辞学がすべて古代漢語と深く関係してあり，これからの漢語文言虚詞問題の研究も中国語学の重要課題として，一つ一つ研究していく所存である。

注

1)『礼記』，49編。『五経』または『十三経』の一つとして重要視される儒教の経典。礼に関する理論及び解説を記したもの。漢の戴徳の編した『大戴礼記』と漢の戴聖（戴徳の甥といわれる）の編した『小戴礼記』と

があるが，前者はもと85編あったが散逸して現在では39編を残し，後者は49編である。『大戴礼記』と『小戴礼記』との関係については，古来諸説があって明らかでないが，一般には礼に関する古い記録を大戴が整理して85編とし，小戴はさらにそれを整理して49編としたと考えられている（宇野精一氏「五経から四書へ」，『東洋の文化と社会』二，参考）

2）山下龍二『全釈漢文大系３』第15頁参考。

3）程頤（1033～1107年）北宋の学者，洛陽（河南）の人，程顥の弟，字は正叔，伊川先生と呼ばれ，兄と合わせて二程子という。彼の説は，程顥の理説を発展させて理とは現象を成立せしめている抽象的な意味であると考え，また理と事（現象）合一を主張し，彼によって宋学の大綱が定められた。著書に『易傳』４巻，『經説』８巻がある。

4）朱熹（1130～1200年），南宋の儒者，字は元晦，または仲晦。号に考亭・紫陽・晦庵・雲谷老人などあり，文公と諡されたが，学者は尊称して朱子という。『四書集注』『詩集傳』『近思録』『朱子語類』など多数の著述がある。

5）曾参（前505～前436年），孔子の門人。字は子輿，春秋時代の魯の人。曾子と尊称される。孔子の教えを伝えるのに最も功のあった一人。特に親孝行で有名。『孝經』の著者ともいわれる。

6）子思（前492～前431），孔子の孫で儒家。名は伋，字は子思，父が伯魚という。曾子の門人。『中庸』を著したといわれる。子思子と尊称される。

7）孟子（前372～前289），戦国時代の思想家。魯の鄒の人。名は軻，字は子輿，または子車ともいう。孟子の「子」は敬称。孔子の孫の子思の門人に学び，のち，諸国を周遊して王道・仁義を説き，儒教の伝導者をもって任じた。特に人間の本性を善とする性善説を説いたことで有名である。亜聖と仰がれる。

8）論語。書名。二十巻。孔子が門人や当時の人と応答した語や，孔子の言行，門人の問答などを記したもの。

9）書名。孟子の言行や学説を記したもの。七編。孟子の学を学んだ者が編集したものといわれている。『孟子』の書が，特に尊ばれるようになったのは，唐・宋以後のことである。

10）儒学の五つの経典，『易経（周易）』『書経（尚書）』『詩経（毛詩）』『礼記』『春秋』をいう。漢の五帝が五経に通じている学者をそれぞれ五経博士に任じ，大学でテキストとして用いたのに始まる。

11）劉宗周（1578～1645年），明末の学者，字は起東，号は念台，蕺山先生とも呼ばれる。山陰（浙江）の人。1601年進士，官は都察院左都御史にいたった。学問は陽明学。明の最後をかざる大哲学者というべく，弟子に黄宗羲が出た。

12）荻生徂徠（1666～1728年）江戸中期の漢学者。名は双松，字は茂卿。徂徠は号（護園とも）。中国風に物徂徠とも称した。はじめ朱子学を学び，のち古文辞学（明の李攀龍・王世貞らが，文は漢以前，詩は唐の天宝以前を理想とし，宋学を排斥した文学上の主張）を唱えた。

13）伊藤仁斎（1627～1705年）。江戸初期の儒学者。名は維楨，号は仁斎・古義堂。京都の人。古学派（漢・唐の時代の注釈によって孔子や孟子の説く真意を明らかにしようとする江戸時代の学派）の始祖。京都の堀川に家塾を開いて約三千人の門弟たちを教育した。著書に『論語古義』『孟子古義』。

14）戦国時代，前403年に晋を分割して韓・魏・趙が成立してから，前221年に秦の始皇帝が天下を統一するまでの百八十三年間の乱世をいう。この時代は，戦乱が続いていたから，或いは『戦国策』に記されている時期であるから，この名称が生じたという。農業・商工業が発達し，文化的にも「諸子百家」が活躍し，多くの思想が開花した。

15）詩経。中国最古の詩集。五経の一つ。殷代（前1600？～前1050？）から春秋時代にかけての詩三千余編を集め，孔子が刪（けず）って三百十一編（うち六編は題名のみが伝わる）とし，儒教の経典としたものという。内容は，風（国風―諸国の民謡）・雅（大雅・小雅―儀式用のうた）・頌（祭典用のうた）の三部に分かれ，国風が過半の百六十編を占めている。これらはすべてメロディをともなって歌われたものである。なお，詩には，賦（物事をありのままに述べるもの）・比（たとえを用いて述べるもの）・興（まずある物事をたとえによって象徴的に歌い，その後で自分が歌おうとする事柄を述べるもの）の三つの表現法があり，詩の三種の体裁の風・雅・頌と合わせて「六義」といわれる。

16) 書経。書名。五経の一つ。尭・舜から周（前1050？～前256）を経て，秦の穆公までの政道についての記録。古くは単に『書』といい，漢代には『尚書』，宋以後『書経』というようになった。現存する58編のうちには後人の偽作も混じる。年号の出典，『書経』尭典：百姓昭明にして，万邦を協和す。――昭和。『書経』大禹謨：地平らぎ天成る。――平成。

17) 山下龍二，全釈漢文大系３『大学・中庸』第十五頁参考。

18) 注17同書，第十六頁から第十七頁参考。

19) 科挙。中国で行われた高級官吏の採用試験制度。隋代から清末までの約千三百年間にわたって行われ，時代によってその科目は異なった。唐代では，秀才・明経・進士・俊士・明法・明算の六科目に分かれ，宋代には，進士・明経・明法の三科目となった。また，試験の段階も，解試（郷試）・省試（会試または貢試）・殿試の三種があり，文官を採用する科挙のほかに，武芸によって武官を採用する武科挙（武挙）も，唐代以来，行われた。

20) 士大夫，中国の上流階級をいう。語原的には中国古代の五階級，天子・諸侯・大夫・士・庶民の中の第三と第四を合せ称したもの。宋以後になると士大夫は社会的には農工商以外の読書人・知識階級を意味し，とくに科挙出身の文人官僚を区別していうときに用いる。

21) 曾鞏（1019～1083年）北宋の政治家・文学者。字は子固。号は南豊。南豊（今の江西省黎川県）の人。唐宋八大家の一人。項羽の愛姫虞美人を悼んだ七言古詩「虞美人草」の作者。

22) 司馬光（1019～1086年），北宋の政治家・学者。字は君実。諡は文正。今の山西省夏県の人。涑水先生，或いは司馬温公ともいわれる。その著『資治通鑑』（294巻。1362年間の編年体の史書である。また，徳川光圀編の『大日本史』の編集にも大きな影響を与えている。）は不朽の歴史書でもある。

23) 注17同書第二十二頁第二十三頁参考。

24)『千字文』書名。一巻。梁（502～557年）の周興嗣が武帝の命により著したもの。初学者の教科書，習字の手本として，中国や日本でも広く用いられた。「天地玄黄，宇宙洪荒」から始まる二百五十句の四言古詩，計一千字からなる。

25)『三字経』，書名。宋の王伯厚著。一巻六編。「人之初編」，「四書編」，「百家編」，「歴史編」，「聖賢編」，「勤学編」。江戸時代，大橋順が『本朝三字経』を児童教訓書として著した。「我日本，一称和，地膏腴，生嘉禾，人勇敢，長干戈」のように日本の歴史的事実を三字を一句として敍述。

26)『百家姓』，姓を配列した学童の識字用テキストで，宋の呉越王銭氏のとき，民間で作られたという。通行本は単姓408，複姓30，計438字を収めている。

27)『全釈漢文大系』月報―５，第３巻。『大学』の中の小学――加地伸行，昭和49年３月，集英社，第二頁参考。

28) 注27同書，第二頁参考。

29) 大夏経典19，『四書新解』王天恨訳注，第一頁参考。

30) 注29同書，第一頁参考。

31)『孝経』，書名。全１巻（18章）。儒教の経典の一つ。孔子がその門人の曾子に主として孝道について説いたのを，曾子または，その門人が記録したものといわれる。戦国時代に完成した。

32) 注27同月報，第二頁参考。

33) 鄭玄（127～200年），後漢末の学者，北海高密（山東）の人，字は康成。彼は古文を主として，今文・古文の諸説を総合して一家をなし，広く六経全体を研究した。古典解釈の功績は偉大で，後世の漢学のために重要な書物を残した。現存の『三礼注』『毛詩鄭箋』はその中でも代表的なものである。

34)『全釈漢文大系』３，集英社，昭和54年７月30日第１刷。第一七七頁参考。

35)『漢書』，歴史書。百二十巻。後漢の班固が，父，班彪の志を継いで書いた前漢一代の記録。『史記』にならった紀伝体で，本紀十三巻，表十巻，志十八巻，列伝七十九巻から成る。二十四史の一つ。

36)『隋書』，歴史書。八十五巻。二十四史の一つ。唐の魏徴らが太宗の命によって編集した隋の正史。六三六年成立。

37)『唐書』，歴史書。二百二十五巻。唐代の正史で，二十四史の一つ。本紀十巻，志五十巻，表十五巻，列伝百五十巻から成る。宋の欧陽脩らが勅命によって著したもの。

38) 同注２，第一七七頁参考。

39) 孔子（前551～前479年）春秋時代末期に魯の阪邑に生まれた大思想家・学者で儒家の祖。

40) 顔回（前521～前490年）春秋時代，魯の人。字は子淵。顔淵とも呼ばれた。孔門十哲の第一人者。後世，亞聖と称せられる。

41) 大夏経典19巻『四書新解』中庸篇。大夏出版社。

42) 欧陽修（1007～1072年）北宋の政治家・学者・文章家。唐宋八大家の一人。廬陵（今の江西省内）の人。著書は『欧陽文忠公文集』百五十三巻，『新唐書』『新五代史』『毛詩本義』など。

43) 蘇軾（1036～1101年）北宋の政治家・文豪。唐宋八大家の一人。字は子瞻。号は東坡居士。眉山（今の四川省内）の人。宋代文学の最高峰に位し，『蘇東坡全集』百十五巻がある。父は蘇洵（1009～1066年）。弟は蘇轍（1039～1112年）。いずれも唐宋八大家の一人に数えられて「三蘇」と称される。

44) 清朝（1616～1912），学問を奨勵して『四庫全書』を編纂し，漢人学者を使って文化の興隆に精進した。

45) 崔述（1740～1816年），清代の学者。大名（今の河北省内）の人。古代研究に没頭して『考信録』36巻を著わした。

46) 同注２，第一七八頁参考。

47) 儒教，孔子を祖とする学派の教え。修己・治人に力を尽くすことにより，人類の幸福・社会の平和の実現を目的とする一種の倫理学・政治学である。

仏教，釈迦牟尼が前500年開創した宗教。人間存在は欲望を根拠として成立し，人が物心の事象に愛着するところに苦悩の源がある。すべてのものは孤立し固定した存在ではなく，相互に関係し交渉しあって成立し存在し，しかも一刻もとどまることなくつねに変化していることに達観すると，みずからを拘束して苦悩をつくっている我見から解放され，すべてに恩を感じる歓びの生活，苦悩を超克した自由の境地がひらかれてくる。それはなんびとでも八正道を実践することによって達成せられる。

道教，中国で成立した。民間信仰を中心とする多神教的宗教。現在の幸福や不老長寿を追求する現世的利益を目的とするもの。黄帝・老子・荘子らを祖とする無為自然を主旨とした老荘哲学，中国古代の民間信仰や不老不死の神仙の説を中心に，陰陽五行説，易などを取り入れた宗教。

48) 同注２，第一八三～一九七頁参考。

49)『中学語文教師手册』（上册・下册）上海教育出版社，1981年。『古代漢語』王力主編，中華書局，1981年修訂本。

50) 中国語学会『中国語学』第227号，波多野太郎先生「北京大学教授王力博士」より，王力博士，1900年８月10日廣西省博白県岐中村に生れた。中国の古文法を研究した。1927年，27歳でパリ大学に入学し，実験音声学を研究し，1931年に「博白方音実験録」の論文により，文学博士の学位を獲得した。先生は半世紀余りの歳月の間，漢語研究と教育との仕事に従事され，著書40種，論文130篇をものにされ，語法学・音韻学・詩律学・言語史・文字改革・漢語規範化・普通話普及等の分野で卓越した貢献をされ内外に名声が高い。先生の語法研究は，清華大学国学研究院の卒業論文「中国古文法」が梁啓超の好評を博した。1954年北大で始めて漢語史には語音史・語法史・語彙史の三分野があり，先生がその全面的研究をされた。

51) 山東教育出版社，1985年３月第１版『王力文集』第三巻第356頁。

参 考 文 献

1　陝西師範大学詞典編写組編，『古漢語虚詞用法詞典』陝西人民出版社。1988年４月第１刷。

2　中華民國孔孟学会主編，『孔孟学説叢書　学庸研究論集』黎明文化事業股份有限公司出版。1981年１月第１刷。

3　蒋　中正著『科学的学庸』黎明文化事業股份有限公司出版。1985年１月第１刷。

4　潘　重規著,『中国文字学』東大圖書股份有限公司出版。1990年 1 月第 3 刷。
5　李　玲璞主編。文科自学書系『古代漢語精解』上海文藝出版社1990年 4 月第一版。
6　謝　冰瑩・劉　正浩等編譯,『新譯　四書讀本』三民書局出版。1989年 3 月第 2 刷。
7　王　天恨編註『四書新解』大夏出版社，1990年10月第 1 刷。
8　鵝湖書院叢書七　程　兆熊著,『五経大義』上册・下册，明文書局出版。1988年 6 月30日第 1 刷。
9　許　菱祥編著,『中文文法』大中国図書公司出版。1991年 2 月第 2 刷。
10　清・馬　建忠著『馬氏文通』商務印書館。1978年 5 月臺一版。
11　劉　復著『中国文法講話』北新書局出版。1981年 1 月第 1 刷。
12　胡　適著『国語文法概論』遠東図書公司出版，1972年再版第 1 刷。
13　楊　樹達著『高等国文法』鼎文書局出版。1979年 1 月第 1 刷。
14　趙　元任著『語言問題』商務印書館出版。1968年再版第 1 刷。
15　王　了一著『古漢語通論』中外出版社。1972年 1 月第 1 刷。
16　周　法高著『中国古代語法――稱代篇』臺聯国風出版社。1972年 3 月重刊。
17　高　名凱著『漢語語法論』開明書店出版。1980年 2 月第 1 刷。
18　湯　廷池著『国語語法研究論集』学生書局出版。1979年 1 月第 1 刷。
19　譚　全基編著『古代漢語基礎』華正書局出版。1982年 1 月第 1 刷。
20　黄　六平著『漢語文言語法綱要』漢京文化公司出版。1984年 4 月第 1 刷。
21　裴　学海著『古書虚字集釈』世一書局出版，1978年 1 月第 1 刷。
22　呂　叔湘著『文言虚字』開明書店出版。1980年復刻再版。
23　周　法高『上古語法札記』，中央研究院歴史語言研究所集刊第22本。1966年刷。
24　許　世瑛著『常用虚字用法浅釋』復興書局出版。1981年第10刷。
25　鄭　錦全著『語言学』台北・学生書局出版。1980年 1 月第 1 刷。
26　何　淑貞著『古漢語特殊語法研究』学海出版社。1968年第 1 刷。
27　清・段玉裁著『説文解字注』南嶽出版社1969年復刻再版。
28　梁　啓超著『要籍解題及其讀法』中華書局復刻再版1965年。
29　屈　萬里先生全集第四册『先秦文史資料考辨』聯経出版公司。1972年。
30　張　以仁『国語虚詞集釋』中央研究院歴史語言研究所專刊。1966年。
31　張　以仁『国語虚詞訓解商榷』中央研究院歴史語言研究所集刊第36本。1970年。
32　三野　昭一著。『中国語文法の基礎』三修
33　張　之強・許　嘉璐編。『古漢語論集』湖南教育出版社。1988年 1 月第 1 版。書店出版。1984年11月第14版発行。
34　〔元〕盧以緯著，王克仲集注。『助語辭集注』中華書店出版。1988年12月第一版。
35　湯可敬主編。『新編古代漢語』（上），（下），北京出版社。1989年12月第 1 版。
36　周　法高著作。『中国古代語法』稱代編，全二册北京中華書局出版。1990年 1 月第一版。
37　《中学語文教師手册》編委会編・姚　麟園主編。『中学語文教師手册』上册・下册。上海教育出版社出版。1981年12月第 1 版。
38　中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編。『古漢語研究論文集』（二）。北京出版社出版。1984年 9 月第 1 版。
39　王　力主編。『古代漢語』（修訂本）第一册・第二册・第三册・第四册。北京中華書局出版。1962年11月第 1 版。1990年 3 月北京第19次印刷。
40　王　力著作。『王力文集』第三巻。山東教育出版社出版。1985年 3 月第 1 版。
41　呂　叔湘著作。『中国文法要略』上・中・下巻，商務印書館出版。1941年 5 月第 1 版。
42　繆　一之編著。『漢語語法基礎知識』湖北人民出版社。1957年 7 月第 1 版。
43　施　樹林編著。『漢語語法提要』江蘇人民出版社。1957年 3 月第 1 版。

44　王　了一著。『漢語語法綱要』新知識出版社出版。1957年３月第１版。
45　何　容著。『中国文法論』台湾開明書店。1954年６月第１版。
46　呂　叔湘・朱　徳熙共著。『語法修辞講話』開明書店出版。1951年12月第１刷。
47　郎　峻章著。『漢語語法』遼寧人民出版社出版。1955年４月12日第１版。
48　山下　龍二著。全釈漢文大系第三巻『大学・中庸』集英社出版。1974年３月初刷。
49　市原　亨吉・今井　清・鈴木　隆一共著。全釈漢文大系第十二巻・第十三巻・第十四巻『礼記』上・中・下。集英社出版。1976年６月30日第１刷・1980年９月30日第２刷。
50　田部井　文雄・菅野　禮行・江　連隆・土屋　泰男共編。『漢詩漢文小百科』大修館書店出版。1990年４月20日初版発行・1990年６月10日再版発行。
51　森野　繁夫・佐藤　利行共著。『漢文』白帝社出版発行。1989年４月20日初刷。
52　孫　昌武・筧　久美子共編。『中国古典詩詞選』白帝社出版発行。1986年11月20日初版発行・1990年３月10日２刷発行。
53　上野　恵司著。『標準　中国語工』白帝社出版発行。1989年12月10日初刷発行・1991年４月10日４刷発行。
54　中川　正之・木村　英樹編訳。朱　徳熙著『文法のはなし』光生館。1986年11月20日初版第１刷。
55　土屋　申一著。『中国語文法入門』大学書林。1979年８月10日第１刷。
56　児野　道子著。『中国語文法讀本』光生館。1989年２月10日初版第１刷。
57　三野　昭一著。『中国語文法の基礎』三修社。1991年４月１日第17版。
58　山田　勝美著。『漢字の語源』角川書店。1976年３月30日初版・1988年６月20日17版。
59　中澤　希男・澁谷　玲子共著。『漢文訓読の基礎』教育出版株式会社発行，1985年11月13日第１刷。
60　輿水　優著。中国語研究学習双書⑧『中国語の語法の話――中国語文法概論』光生館。1985年３月15日初版第１刷・1991年９月１日第４刷。
61　香坂　順一編著。『中国語虚詞辞典』光生館。1988年９月10日初版第１刷・1992年５月20日第３刷。
62　西田　太一郎著。『漢文の語法』角川書店。1980年12月10日初版。
63　大滝　幸子，「中国語語気詞の意味記述」（その２）中国語学会『中国語学』第227期，1980年11月14日刊。
64　小川　文昭，「構造について」中国語学会『中国語学』第229期，1982年11月20日刊。
65　原　由起子，「語気副詞〈可〉と〈并〉〈倒〉〈却〉中国語学会『中国語学』第232期，1985年11月８日刊。